

one

12号

2002年・春号

「もはや二人ではなく一体 (one) である」マタイ19:6

## Information

- ・今年もまた結婚感謝ミサがあります。  
日 時：2002年5月12日(日)15:00～  
場 所：聖イグナチオ教会 主聖堂  
懇 親 会：16:00～ ヨゼフホールにて
  - ・幼児洗礼もあります。  
日 時：2002年5月19日(日)11:00～  
場 所：聖イグナチオ教会マリア中聖堂  
懇 親 会：12:00～ ヨゼフホールにて
- ご意見・ご感想は… e-mail:one@ignatius.gr.jp

## 「いただきます」の約束

— 福山 順子 —

今年も復活祭を祝うごちそうが食卓にならぶ。

みんなで持ち寄った料理のひとつひとつをワクワクしながらながめ、レシピをたずねあう。

セミナー修了生との小さなパーティの最中、セミナー同級生からこんな素敵な話をきいた。

二人は2000年に結婚した。二人は結婚したとき食事についてひとつの約束をした。

「夫は必ず妻の作った夕食を食べること。妻は1品必ず新しいメニューを食卓にのせること。」一夫からの提案だった。

それから、1年余りが過ぎた。毎日新しいメニューを増やしていくことは、料理をあまりしたことのない妻にとって、大変な修業だった。

しかも彼女は毎日フルタイムで働いていた。そんな妻の努力に夫は、会食があっても必ず妻の料理を食べ

ることで応えた。

「こんな約束のおかげで、今ではわたしのレパートリーもずいぶん増えました。それに、わたしの作った新メニューの話題が食卓にあがるのは、食事を楽しくする思わぬ副産物でした。」

「なんて羨ましい！」それが真っ先に口をついて出た言葉。でも、ちょっとばかり考えこんでしまった。うちのダンナは夜、外食して遅くなることが多いし、そのあとに「家でも食事をして」なんて言ったら帰ってくるのをイヤがりそう。第一、わたしが毎日新メニューを作るなんて、とてもじゃないけど無理。こんな言い訳めいたことを思ってしまう。

そういえば、うちでは「食事」についてこだわっていることって、あったかな？ そうだ、ひとつだけあった！ それは、朝ごはん。どちらかが、どんなに前夜遅くなって、胃

もたれしていようと二日酔いだらうと、朝の食事は必ず向き合って「いただきます」をすること。朝なら特別なことのない限り二人そろっているし、前夜話せなかったことも朝の食卓で話せる。とてもちいさな、些細なことだけど、これが我が家のきまり。どこの家庭でも当たり前のようにしていることかもしれないけれど、今できることを続けていける二人でいたいな。家族が増えたら、もちろん家族みんなまで。



## 司祭からのメッセージ

— 長町 裕司 —



日本でも少しは知られていると思うが、ドイツ・ロマン派の音楽家ロベルト・シューマン (1810-1856) は、クララ嬢との長い年月思い焦がれていた結婚が実現した1840年、溢れるばかりの歌曲を生み出した。その中で、『ミルテの花』(ミ

ルテ=純潔の象徴)と題する歌曲集は、結婚式当日にクララに捧げられているが、その締めくくりに『終わりに』は当時随一の東洋学者として知られたフリードリッヒ・リュッケルトの次の詩を作曲したものである——

「物悲しい気持ちが解け入る、大地を締めつけるようなこの空気の中で/ぼくは君に完璧でない花輪を編んだ、我が花嫁よ/天へと引き上げられ受け入れられて、神の御子が私たちに迎えまみえる時/その時愛が私たちに完璧な花輪を編んでくれるだろう、我が花嫁よ」

この詩は勿論、花婿の心情を詠い出したものではあろう。けれども、私たちの聖イグナチオ教会での挙式の中で、結婚の儀の締結後、誕生したばかりの新夫妻

のみなさんが共唱する「二人の祈り」には、このような確信が込められているような思いがする。明るい希望に支えられながらも前途多難で霧の中を進むような結婚生活を自覚するからこそ、二人を結ぶ愛の源であるものに呼びかけつつ、信頼を託して祈るのである。みなさんがホヤホヤのホームメイドのこの祈りを唱えるとき、司祭である私は初めて二人と並んで立ち、隠れたる神に対する新家庭の信仰宣言に共振する。

「結婚生活の鍵」とは、ただ二人の相互理解の愛情の努力だけでなく、新夫妻固有に懐胎され育まれる「共通愛」ではなかろうか。結婚の絆による密な共生がはらむ衝突状況を克服するこの灯火こそ、教会を通して強められた贈り物と思う。

夫婦は共同体であり、一体です  
でも二人で、 $1+1=1$ ではありません  
それぞれ自立した大人同士が  
より豊かな人生への期待から縁あって、夫婦となる  
つまり $1+1\rightarrow\infty$   
二人の関係は2からはじまって無限に広がる

二人でいるだけで幸せ……  
そんな気持ちを、結婚してから何十年経っても持ち続けるためには、  
どんなプロセスを通るのかな……

夫婦の歩みをいくつかのステップに分けて考えてみました

もともと相性がいいはずの二人です  
急がないで、あせらないで  
チーズやワインだって時をかけて、熟成するから、はじめて美味しくなるんです

## 特集： 夫婦って $1+1=1$ ? それとも $1+1\rightarrow\infty$ ?

### 1. Getting to Know You

少しわかってきた

親や兄弟姉妹なら、何も言わなくてもわかってくれるのに…なんだか孤独。でも夫婦だからわかってほしい。やっぱり話そう。たとえケンカになっても、仲直りすると、前よりずっと二人の間が近くなったような気がします。

(結婚2年 妻34才)

最初の頃は、「完璧に家事と仕事を両立させなきゃ」とすごく頑張りました。でも、だんだん辛くなって、ある日爆発。「何で私ばかり、こんなにがんばらなきゃいけないの。」そうしたら、夫は「そんなに君ががんばっていたなんて知らなかった。」って言うんです。夫は私が、仕事も家事も楽しそうにこなしていると思っていたんですって。それからは、ちゃんと辛いとか、嫌だとか言うようになりました。私も夫のことをいろいろ勘違いしていることがあるのかもしれない。時々、夫に「あなた、こんなふうに見えるけど、当たってる？」なんて聞いたりしています。

(結婚5年 妻32才)



### 2. Living, Working, and

### Growing Together

毎日の生活の中で

電気がついていて、暖かい家で「おかえりなさい。」と迎えてくれる人がいる。ずっと一人暮らしをしていた僕は、「結婚してよかったなあと思います」妻に感謝!

(結婚10ヶ月 夫27才)

一人っ子だった僕は、ずっと大人ばかりに囲まれて育った。結婚したら自分と同世代の家族(妻)が家にいる。そんなことがすごく新鮮に思えた。

(結婚1年 夫30才)



「オムツがぬれているんじゃないか？」手際よくオムツを換えるウチのダンナさまは、「オムツはどこ？」なんて騒ぎません。オムツの場所くらい、ちゃんと知っています。こうなるまでにはいろいろあったけれど、ウレシイこのごろ。

(結婚3年 妻31才)

子供が生まれてからも、パパ・ママと呼ばずに名前で呼び合おうね、なんて約束していたのに、結婚して7年。今は二人だけで外食しても、ついパパ・ママと呼んでしまい、お互い苦笑い。

(結婚7年 夫38才)



「今晚のおかず何？」と夫。夕食の支度をしながら、「お刺身。」と答える私。「おおっ！刺身かぁ、食べたいと思ってたんだ。」とはずんだ夫の声。我が家に時々おこる小さなうれしい以心伝心。

(結婚5年 妻35才)

子供たちが寝たあと、家事を家内と一緒にしながら、いろんな話をしたり、好きなお茶を煎れてお菓子を食べながらテレビを見たりします。心地よく大切な時間です。

(結婚7年 夫36才)

お産のために盛岡の実家へ里帰り。実家の近くのコンビニでSMAPのコンサートチケットを売っていた。「無理かな？」と思いつつ、東京にいる夫の携帯に電話。「今週末SMAPのコンサートがこっちであるけど、行かない?」「えっ、ホント?行く。」と二つ返事。子供二人を母に預けて、二人で久しぶりに思いっきり盛りあがった。「このままもう少し遊んでいこうか?」と夫はノリノリ。そうだ、子供が生まれたって、私たち二人はこんなふうと一緒に遊べるんだ!

(結婚6年 妻34才)

子供のいない僕たち。だからこそ、ながあいプランを立てて、ゆっくり二人で進みたい。

(結婚12年 夫40才)

この頃二人でなんと良く働くことか。週末には二人でまとめて買い物、掃除。おもしろいね、一緒にスーパーへ行くの。結構楽しいね、掃除って。

(結婚3年 夫33才)



### 3. Fact! Fact! Fact!

#### 次々おこる現実

家事に支障のない仕事を選んだつもりだったのに、最近では仕事量も増えてきて、責任も出てきた。正直言って、仕事がおもしろくなってきた私。でも、そんな最近の私をみて、夫はちょっとご機嫌ななめ。こんな時、独身だったら迷いは無いのに。

(結婚2年 妻30才)

結婚して5年目、僕らには子供がいない。妻は何も言わないが、そろそろ自分の年齢を気にし始めているようだ。

天の恵みを待つのか、積極的に治療をすべきなのか、いま僕は迷っている。

(結婚5年 夫35才)

この間、夫の携帯を見ちゃったんです。そうしたら、私の知らない女性の名前が着信記録に残っていて、履歴を見たら何度も同じ女性からの電話があるんです。夫に問いつめたら「間違い電話だろ。」って言うんです。そんなの信じられません。

(結婚12年 妻41才)



今度二世帯住宅を建てることになりました。そう、主人の両親と。もう、工務店を決めるところから、大もめでした。結局両親が気に入った工務店にしたんですけど、私たちの意向なんて、無いも同然。主人は皆にいい顔をするばかりで全く埒があかないし。

(結婚8年 妻40才)

我が社のリストラ計画が発表された。今回は同業他社との合併に伴うものでかなり大がかりだ。3ヶ月後には、早期退職者を募らしい。僕ら30代も、もはや対象外ではない。早期退職に応募して、さらなるステップアップに勝負を賭けるか。それとも、なんとかこのまま居残るか。子供はまだ小さいし、マイホームも欲しい。でも…

妻と子供の無邪気な寝顔を見るのが最近辛い。

(結婚9年 夫37才)

### 4. Accepting and Sharing

#### 受け入れ、わかち合う

夫の裏切りを到底許すことはできないと思いました。でも、彼を許さず、彼を受け入れることを拒否したら、彼を失うのだと悟りました。でも、それは「イヤだ」と素直に思ってしまったのです。

(結婚7年 妻36才)



かみさんが過労で倒れた。医者は精神的なストレスからくる疲労だと言った。僕の両親との同居のストレスを彼女は、僕に愚痴を言って発散できていると思いこんでいたのだ。僕はかみさんのSOSを結局受け取れていなかった。かみさんが目を覚ましたら、まず謝ろう。そして、今度こそ彼女の声に耳をすましてみよう。

(結婚23年 夫46才)

主人に突然の転勤の辞令。「一家で引っ越し？ 子供たちの学校は？ やっと手に入れたこの家は？ じゃあやっぱり、単身赴任？」私の頭は大混乱。その時、主人が「落ち着けよ。君は一人じゃない。僕が一緒だ。これからのことは、ゆっくり二人で考えよう。」この一言のたのもしかったこと。

(結婚13年 妻40才)

## 5. In Spite of Everything, I Believe in You

### 信 頼

そしてまた

1. Getting to Know You

2. Living, Working, and Growing Together

3. Fact! Fact! Fact!

4. Accepting and Sharing

そしてまた、1.2.3.4.——

の繰り返し……

でももう大丈夫!!

ツーラウンドからは、

信 頼 がいつも支えてくれるから

### — 番外篇 —

■ 長年上げ膳据え膳のダンナ様。でも気がついてみれば、最近お箸を箸置きにセットするのは彼の役目。食器なんかには無頓着だった彼なのに、和食には和風の箸置きを、中華料理には中華風のものを用意してある。進歩、進歩。心の中でニンマリ。

■ 「いつもご主人と一緒にね。」なんて冷やかされるけど、子供のいない私たちは小さなトラブルでも、いつも二人でひとつひとつクリアしていかないと前にすまないのね。思い返すと、私たち夫婦の歩みは、二人でいる意味を常に確かめ合っている歳月のような気がします。

■ まあ、これだけ長く一緒に生活しているんですもの。これからも、なんとなく一緒なんじゃないかしら？

■ 結婚した当初は、おふくろのみそ汁が一番旨い！って思ってたんだよ。ところが今じゃ、ワイフのみそ汁の味に慣れてしまって、おふくろのみそ汁は、なんか間が抜けているような気がするんだよね。

■ 子供たちの小さい頃の写真なんか見てね。「この頃はこうだったわね。」なんて話していると、主人が隣で「うん、うん。」って、あいづち打つ。結局、思い出を一番多く共有しているのは主人なのよね。そう考えると、やっぱりかけがえのないパートナーなんだなと思うの。

## と洗礼にはどういう意味があるのですか？ — 粟本昭夫 —



Q. 世の中には、洗礼を受けていなくても、心の中で「神を信じている」人は多いと思います。聖イグナチオ教会で結婚式を挙げた、私もその一人です。洗礼にはどういう意味があるのですか？

A. キリストは確かに「信じるものは救われる。」とおっしゃっています。するとわざわざ洗礼を受ける意味は、一見ないように思えますが、私たちはこう考えます。

一口に「神を信じる」といっても、神の概念はさまざまです。キリスト教では、キリストを神であると信じています。そして、十字架にかけられたキリストは全人類の罪を背負って死に、その犠牲ゆえに、人類の罪は浄化され、「地上の命」が失われても「永遠の命」、つまり、世に言う「天国へ行くこと」を約束された状態にあると信じています。これを「救われる状態にある」といってもいいでしょう。

洗礼とは、この約束された「永遠の命」即ち「救い」を確実にする目に見えるしるし(秘蹟)です。神キリストから教会がゆだねられた、「救い」への義務とも権利ともいえるものです。

キリストは私たち全人類が救われるようにしてくださいましたが、人は洗礼によってこの「救い」を自分のものとすることができます。人間の側からの努力や功德によってではなく、「神ご自身が私を神の子として認知してくださいました」という確信を得るのです。実際の生活に目を向ければ、洗礼を受けることによって、人は深い安心感を覚え、信仰心を深めていけるようになります。また、司祭、教会、信徒同士の助けもいっそう受けやすくなるでしょう。

では洗礼を受けないとどうなるのでしょうか。このことについては、教会が任された範囲を超えた事柄ですので、私たちは神様の慈悲あるお取り計らいに期待しつつ、神様にすべてをお任せしています。人類を等しく愛してくださる神様は必ず何か良いようにくださると信じています。





## 夫婦ふたり「ドバイ駐在記」 ～セミナー修了者からのレポート～



昨年9月11日のアメリカ同時多発テロ、それに続くアフガン攻撃…。アフガニスタンと同じ回教国の中東ドバイに駐在するセミナー修了者、上杉謙一郎さん、史乃さん夫妻にドバイの様子、今回の戦争についてレポートしていただきました。

ドバイって？

アラブ首長国連邦（UAE）を構成する7首長国のうちのひとつ。アラビア半島北部に位置するアラブで最も西洋化された、北海道ほどの大きさの国。国教はイスラム教だが他の宗教も認め、キリスト教の教会もある。

### 3年ぶりに2度目の新婚生活

1996年1月、旧聖堂で結婚。謙一郎はソニーに勤務、3年前からドバイに赴任。史乃は外資系金融機関勤務で日本に残るが2000年秋に退職、ロンドンの大学院に留学、昨年秋に修了。テロ事件の影響で、ドバイでの合流を延期。今年2月、ドバイで3年ぶりに「2度目の新婚生活」を再開。



### ドバイの夫婦

現地人の友人を見る限りでは、男性優位とも女性優位とも言い難く、私たちのように恋愛結婚をしている人もたくさんいます。男性も日常的に買い物に参加するのが普通ですが、これは男女の共同家事参加ともとれる反面、財布のひもはあくまでも男性が握っていることの現われともいえるでしょう。これを裏付けるように、ここでは絨毯店や宝石店で、「夫がいなくて決断できない」という、冷やかしか客には格好の言い訳が通用します。

### アラブと西洋文化が融合する国

男性は立派な髭、まばゆい白のロングシャツにベール。女性は頭からくるぶしまで目以外はすっぽり包んだ黒装束。丸いドームのモスクから聞こえる祈りと、街に絶え間なく流れるアラブ音楽。街角に漂う濃厚な香水の香り…。

一方、外国人人口が約80%と高いため、その受け入れ体制も万全。都市生活基盤も整備され、広い道路、スプリングクラに支えられた豊かな緑、夏は40度を越す砂漠気候に対応した全館空調設備など、生活は快適。外国人は服装も自由だし、豚肉やアルコールも手に入れることができます。

ドバイは伝統的アラブの習慣を残しながら大胆に西洋文化を取り入れた革新的な国。石油のみに頼るのではなく、海外の企業を次々に招致し、観光産業に力を入れ、世界各国の資源（ヒト・モノ・カネ）を受け入れることで独自の発展形態を構築しています。大規模なビジネスビル街、5つ星ホテルを擁するビーチリゾート、アラブの伝統装束店とシャネルとが隣接するカラフルな巨大ショッピングセンター、超ワイドスクリーンが売り物のシネマコンプレックス、砂漠の国とは思えないほど青々としたゴルフコース（昨年はタイガー・ウッズがプレー）など、発展の勢いがあらゆるところに感じられます。

現地のアラブ人も外国人の影響を受けつつあり、生活環境のみでなく、女性の社会進出も、小売・観光産業から推察する限り、徐々に進んでいるように見受けられます。



### ハムラビ法典に基づく社会システム

私たちから見てアラブ独特だと感じることは、宗教に基づいた法規制です。食料品、書物、ビデオ、CDなどの通関チェックは厳しくされるし、インターネットのアクセス先が制限されています。刑事法は「目には目、歯には歯を」のハムラビ法典に基づくため、日本人の常識では理解できないような判決が下ることもしばしばです。

どちらが良い悪いということではなく、異なる概念に基づいたシステムの社会にいることをいつも自分に言い聞かせることが大切だと感じています。

### 同時多発テロにクールな対応

日本よりアフガニスタンに地理的に近いといっても、アメリカの同時多発テロについては、強い感情論もなく、至ってクールな対応ぶりです。アメリカの報復についても賛否両論分かれています。様々な国の人々との交流を通じて私たちが考えたことは、正義の国と悪の国が世界のどこかで戦っているという構図はこの問題には当てはまらないということです。この戦争は、国際化が進んだ世界の中での、また一国内での、民族対民族、あるいは同じ民族同士の問題が重なり合っています。テロは今や世界のどこでも起こりうるし、アフガニスタン国内においても、テロリストという他国での加害者と、難民を中心とした自国での被害者が共存しています。

### 自分の問題、常にそこにある問題としてのこの戦争

この戦争は米国・アフガニスタン両国の人々のみの問題ではなく、世界中の人々が自分の問題として捉え、対応すべきだと思えます。自分で考え、自分の姿勢を決めるには、まず現状を知ることが不可欠です。

私たちは偏った報道や既存のイメージで先入観を持ってしまいがちですが、情報源は他にもあるはず。私たちも、アフガン難民のためのチャリティーや、テロ事件以前に製作された、イラン人監督によるアフガニスタンの映画『カンダハール』、また世界各国の友人たちの意見など、新聞やテレビから得るものとは異なる見方をさせてくれる媒体から大きな影響を受けました。このような情報を今度は他の友人たちと交換し、さらに情報の輪を広げていきたいと思っています。

この問題を過去のものとせず、常にそこにある問題として自分の中に捉えていくことが、私たちに今後できることの一步ではないでしょうか。



## ONEの仲間がふえました！

### 結婚セミナーが

### 広島地区でもはじまりました。



1年間の準備のあと、2001年9月から結婚セミナーがスタートしました。指導司祭1名、ヘルパー1組が担当し、参加者は2組から8組という状況です。うれしいことに、



参加者が活発に発言するので、8組までが時間的に限界です。片道6時間かけて徳島から来るひと、東京から新幹線でやって来るひと。彼らの帰路を思うと、時間厳守で終わらなければなりません。

5ヶ月たった今、参加者は29組。結婚式を挙げたカップルが3組。1回1時間半のセミナーが計8回で1クールです。中には、もう少し続けたいという希望が出て、月1回で半年間続けることになったグループもあります。皆さん楽しんでいますが、一番楽しんでいるのは、実はヘルパーなのです。カンガス神父様には良い種まきをしていただきました。

(広島・祇園教会結婚セミナーヘルパー

池澤 功・八百子)

## 息子の結婚

1997年10月18日、長男が聖イグナチオ教会の旧聖堂で結婚式を挙げました。カンガス神父様、ヘルパーの山形ご夫妻のご指導のもと、結婚セミナーに5ヶ月通った後のことでした。

6年前のクリスマス・イヴの夕食に、息子がY子さんを我が家に招きたいと言いました。私は小さなサンタクロースの人形を飾るのが好きで、その時も家中にサンタさんを飾っていました。玄関で人の気配がしたかと思うと、「可愛い、可愛い。」を連発する声が聞こえました。あつという間に息子は家中のサンタクロースを見せるべく、お手洗いで案内していました。サンタを見つける度に発するY子さんのキャアキャア言う声を聞きながら、私は、「あらY子さん、私と同じ趣味かしら」と思いました。それが、Y子さんと初めての出会いでした。そして家族皆が、Y子さんを好きになりました。

私達夫婦はヘルパーとして結婚セミナーをお手伝いするうちに、ご両親の承諾を得られないカップルや、親御さんのどなたかが結婚に際していろいろおっしゃるので苦労していらっしゃるカップルをたくさん見てきました。その度に私は、結婚を決めた二人にとって親の反対が良い結果を生み出すことは何も無いと思っていました。ですから、息子や娘が責任を持って自分で選んだ相手はどんな方でも快く迎えるつもりでした。

## — 若林 佳代子 —

その心積もりがあったせいか、息子が結婚して5年目を迎えた今、新しい家族が増えたことの幸せを感じます。親としてはてこずることが多く、型破りな息子を良いと思って結婚を望まれたY子さんに感謝しています。そして、子どもが成長して、親や兄弟より、もっと大切に思う人、いつも共にいたいと願う人が現れて結婚し、新しい家庭を築いていくのを見ることは、とても嬉しいと実感しています。

息子がY子さんのことを「ウチのカアチャン」と、いとも自然に言うのを聞きながら、5年前まで彼の「カアチャン」だった私は「これでひと安心」とほっとしています。Y子さんありがとう。そして息子をいつまでもよろしく。「返品はお断り」ですヨ。



## — 編集後記 —

ONE創刊に向けて、相談会を初めて開いてから6年たちました。私は当初から参加させていただきましたが、今号をもって、セミナー・クラス修了者の方に、責任者の任をバトンタッチすることになり、心からほっとしています。こんなにも自由に ONE を創ってこられたのも多くの神父様方、教会の諸先輩が応援してくださったからこそと、今更のようにありがたく思います。

翻って、編集局内では老若男女(?)入り交じり、修了者とヘルパーが「今できることを無理なく」を合言葉に、協力し合って紙面づくりに励んできました。といっても、年2回の発行を教会にお約束した以上、いつも誰かが多少の無理をしたからこそ、その責任を果たすことができたのも事実です。忙しい盛りの若い方に大いに活躍していただくためには、誰もが個人として動ける状況を作ることが大切だと思い、先輩後輩といった区別なく、各自が自分で考え、自分の責任で、自分の意見を述べるということを、編集局全員の約束事にしました。お陰で、どんなに意見を戦わせても、しこりの残らない ONE 気質というようなものができつつあるのは、私にとって何より嬉しい収穫です。

ONEのますますの発展を願い、感謝をこめて。

(鈴木 庸子)

## 編集参加者(五十音順)

新井直子  
田京子  
神谷智子  
小林ゆき  
小城正人  
鈴木庸子  
鈴木伸子  
武田太郎  
玉木健太郎  
福富達夫  
福山順子  
森本亜希子  
柳谷晃

写真：森本 正

発行：2002年4月発行  
聖イグナチオ教会 ONE 編集局  
(担当：城間正人・鈴木庸子)  
〒102-0083  
東京都千代田区麹町6-5  
Tel:03-3263-4584  
Fax:03-3263-4585  
URL: <http://www.ignatius.gr.jp>  
e-mail: [one@ignatius.gr.jp](mailto:one@ignatius.gr.jp)

印刷：(株)六甲出版販売  
兵庫県神戸市灘区岩屋北町3-3-18

この冊子は再生紙を使用しています。